『源氏物語』にみる母老尼
―その物語内機能―

文化創造専攻　国文学領域
一六〇〇二ＣＪＭ　水　谷　奈　由

修士論文要旨

『源氏物語』において、高齢の出家者でありながら、ことに娘ないし孫を養育する、特異な女性が登場する。それは「北山の尼君」「明石の尼君」「小野の母尼」「小野の妹尼」である。この母老尼たちがどのように物語に機能し、主題に寄与しているか考察した。

北山の尼君は、都とは異質な地で孫紫の上の〈母代〉として登場した。そして、紫の上と源氏との仲介に終始せず、死後も紫の上が女として成熟するまで守護し続ける存在であることを明らかにした。

明石の尼君に関しては、その呼称の変化に着目した。従来、「尼君」という呼称に意味を持たせてはいなかったが、「尼」と呼称されることで、〈女〉性から切り離された存在として、明石の女たちに尽くす人物像が作り上げられていると考察した。また、彼女は自ら「古人」と称し、孫娘の地位を揺らがせることなく、出生の秘密を明かす役割を担っていることを示した。

小野の母尼は、源信を彷彿とさせる僧都の母として登場した。仏教説話において高僧の母が尊重されたように、最も理想的な母なのであった。そして、浮舟に実母を想起させたり、出家を促したのは母尼であるため、母尼が浮舟の母代として機能している可能性を示した。

最後の小野の妹尼だけは、〈女〉への執着が強く、娘との一体化を望む者として存在しており、特異な老尼であることが露わになった。浮舟を養育するようで、実際は〈女〉なるものの強要であり、愛情という名の支配に過ぎなかったのである。

それぞれ母老尼たちの存在性を明らかにした上で、彼女たちの物語内機能を考察した。母老尼は生殖機能を失い、〈女〉性からも解放された存在である。すなわち、政治的なしがらみがないのである。また、孫娘に対しても、〈女〉性に囚われない、自由な生き方を選ばせさえするのであった。

最後に、『源氏物語』の主題への関与としては、〈母代〉が鍵となっていると言える。源氏が最初に思慕したのは、母ではなく祖母なのであった。すなわち〈母代〉である。その後、源氏は〈母代〉を求めて、藤壺や紫の上に恋慕する。そして、物語の終末では、再び〈母代〉となる小野の母尼が登場するのであった。『源氏物語』に一貫する主題として、〈母代〉が設定され、母老尼たちも〈母代〉として物語を支えているのである。